

第1章

キリバスにおける知識の秘匿と微細な権力の胚胎

風間 計博

要旨： 中部太平洋キリバスの一村落において、知識・技術(*rabakau*)は秘匿されるべきと言われる。村において、知識・技術は多様な領域に及び、それをもつと見なされる人物が数多くいる。キルトスペルマ栽培や手芸品製作といった生産、カヌー操船や踊り等の身体技法に関わる事柄があり、生産されたモノや身体所作という可視的な形で人々の前に現れ、評価されて評判を生む。知識・技術の獲得を巡って人々は交渉を行い、拒否されたり継承される。その秘匿や行使は、微細な権力関係を生み出す。しかし、イモの集会所への供出や他者からの懇請による手芸品の生産等、知識・技術の行使は個人の次元を超えた村人への貢献が求められる。また秘匿しようとしても、拒否しがたい懇請によって伝授を余儀なくされることもある。すなわち、知識・技術は個人的な権力を生み出しうるが、その発生を抑制する集団的制御が作動し、それが異なる次元の権力を常に生み出しているのである。

キーワード： 知識の秘匿、集団性、キルトスペルマ栽培、キリバス

はじめに

知識を巡る諸研究は多岐に亘り、一般に認知科学と呼ばれる領域において、多様なアプローチがなされてきた。ミクロなレベルでは、人間（ヒト）の脳に関わる研究がある。脳神経科学においては、神経伝達物質や電気刺激に基

づく物理化学的現象として知識発生や記憶蓄積の機序を解明しようとする。さらには認知を情報処理計算と置き換え、脳機能を人工的に再現することを目指す情報工学分野の人工知能研究もある。これらは、普遍的と仮定される生物学的なヒトの脳機能や、脳によって産生される知識を数理的情報および物質的基盤から捉えてモデル化する。ただし、こうした機械論的モデル化において前提とされるのは、法則性を前提に置いた論理学や言語哲学である(ライバー [1994])。

一方、異なる次元にある社会科学的方向性においては、外在的な知識を対象とする。社会的な場において発露され、他者に行使される知識を射程に置くことは、間主観的存在としての人間の相互作用(言語および非言語的コミュニケーション)を対象に据える方向に向かう。すなわち、現象学的社会学やエスノメソドロジー等、ミクロなレベルにおける発話や微細な相互行為のあり方に着目するアプローチである。

さらに、発せられる言語から文字化された言語への固定化において、知識の位相は飛躍的に変化する。この飛躍は、認識論的な転換を人間にもたらす¹。書かれて固定化された言語は、知識の源泉もしくは知識そのものと見なされ、権威を帯びる。例えば、アカデミズムの論文、政府により明文化された法律や公文書、さらには絶対的権威を保持する宗教的聖典があげられよう。内実を問わず文書自体が物神化されることもあるが²、一般的に文書の価値が外在化するには、解読や理解が必要とされる。理解には特殊な熟練や技能が必要であり、教育という知識階梯システムがここに作働し、重要視されることになる。書かれた言語においては、詩的言語を例外として、メタレベルの論理性が卓越する。

さて、オセアニアにおいて在地の文字はほぼ存在せず、西洋人(宣教師および植民地統治者)との接触によってアルファベットが導入され、書き言葉が作られ、流布していった。そうした西洋的な知識様式の導入以前には、記憶され、語られ、秘匿される知識が優位であった。神話や系譜、あるいは財の交換の履歴に関わる知識、秘密結社や呪術に関わる秘儀的知識等がある。こう

した知識の領域は、主に一部の成人男性により占有される傾向があり、財や威信の獲得競争の場において重視されるものであった。これらは直接的に権威に関係するが故に、日常生活の場においては、常に発露されてきたとはいえないだろう。

日常生活を営む場において、あらゆる知識が言語化されたり、体系的に理解される性質に偏向するわけではない。身体的所作や技に関わる暗黙知・身体知と言いうる様式は、言語化しえない知識領域に大きく包含される（ポランニー [2003]）。また技は言語だけでは伝えられず、徒弟制などの独特な伝達システムが採られる（レイヴ&ウェンガー [2001]）。こうした身体に関わる技の伝達の追究は、「知識とは何か」といった存在論的命題の立て方とは異なる、人間の関係性のなかに知識を捉え返す方向性といえよう（生田 [2001]）。普通の人々により、日々繰り返される行為に見られる些細な知識もまた、必ずしも言語化されるものとは限らない。すなわち、体系性と文字を中心に据えた西洋近代の合理的思考から滑り出た知識の領域がある。そこでは、身体や感覚を議論に取り込む必要が生じるのである³。

本論では、調査地の人々の日常的振る舞いおよび民俗語彙を鍵として、些細な知識について見ていく⁴。より具体的には、調査地のキリバス離島村落部で頻繁に耳にする言葉ラパカウ(*rabakau*; 知識・技術)に着目する⁵。即ち、ラパカウとはいかなるものか、いかに行使され、またいかに秘匿されているのかといった事例を採りあげ、議論の俎上に乗せる⁶。ここで留意すべき点は、実在論的あるいは実体的なレベルにおいてではなく、身体をもち相互に関係性を結ぶ人々の間でラパカウを捉えることである。

第1節 知識・技術を巡る交渉

1-1 知識・技術の多様性

本論の対象地は、中部太平洋のキリバス共和国南部離島、タビテウエア環

礁南部に位置する N 村である⁷。N 村では、知識・技術(*rabakau*)を持っていると見なされる人が数多くいる。個人の特殊な知識・技術は多様な領域に及んでいる。例えば、外洋漁ならば誰々、捻挫や打撲に効くマッサージならば誰々といったように、人々が認める技術者が至るところにいる⁸。そして技術者は、多くの人々から羨望(*mataai*)を受けるのだという。ここでマタ(*mata*)とは目を意味する。ただし、これら技術者は、自らのラパカウを他者に誇示することを慎重に避ける点に留意すべきである。

ある長老によると、秘匿すべき知識・技術には、キルトスペルマ栽培(*ribana*)、漁(*akawa*)—とくにカヌーの操船術を要する外洋漁—、ココヤシ樹液採取(*koro karewe*)、ココヤシの糖蜜(*kamwaimwai*)作り、板状パンダナス果実保存食(*tuae*)作り、「いい匂い」をつけたココヤシ油(*bwa*)作り、細編みパンダナス葉マット(*kie*)作り、カヌー(*wa*)建造、ウツボ漁の釜(*uu*)作り、キリバス・レスリング(*kaun rabata*)、キリバス・ダンス(*maie*)、腹痛や捻挫等の患者へのマッサージ(*riring*)等、多くの種類がある。このうち、外洋漁やレスリング、樹液採取、カヌー建造は男性に排他的なラパカウである。ココヤシ油やマット、パンダナス果実保存食作りは女性のラパカウである。一方、とくにジェンダーに関わらないものもある。

各種の知識・技術の種類を概観すると、手芸品を作る、栽培するといったモノを生み出す方法や、カヌーを操る、踊るといった身体技法に関わる事柄が主要である。生産されたモノ自体、あるいは踊りにおける身体といった可視化された形で知識・技術は具現化し、それを見て人々は判断し、噂する。またそれらは、技術者の認識・直感や身体所作といった、言語化されにくく、それゆえ他者に伝えにくい性質をもつ。これらは当然、体系付けられて一般化されているわけではない。

1-2 秘匿と拡散

一般的にいえば、知識の秘匿はその不均等な分布を招来し、その偏りがあ

る種の権力関係を生じさせる。換言すれば、権力を志向する者は知識を秘匿することになる。本節では、ラパカウを巡って、人々の間でいかに交渉が行われるかを見る。

ある長老は、「白人や日本人は本を書くことによって知識・技術を広めるが、キリバスでは親族以外の者に教えるのは禁止されている(*katabuaki*)。キリバスのやり方(*katei*)は悪い(*buakaka*)」と語った。確かにキリバスでは「自分だけに〇〇を教えてくれ」といった言葉をしばしば聞く。20代既婚男性2人が夜、こっそり私の家へ来た際、「柔道の技を自分たちだけに教えてくれ」と言っていた。私は「できないから教えられない」と言って断ったが、なかなか信じてもらえず、柔道のラパカウを秘匿していると思われたようだった。また、研修や留学で外国へ行ったキリバス人は、その知識を自分だけのものにしてしまい、帰国しても教えないという。結局、技術の普及が進まないという援助関係者の話を私は首都で聞いた。

N村でも類似した話を聞いたことがある。ある女性は野菜の栽培に興味をもっていた。ところが島に駐在する農業省の役人は、栽培の知識・技術を教えてくれないと彼女は愚痴を言っていた。農業省の役人は当然、栽培技術を離島に普及させるために派遣されているはずであるが、知識・技術を隠していると噂されるのである。農業省の出張所に付随する小さな農園で作った僅かの野菜は、大きな饗宴があると、主催者に懇請され、すぐになくなってしまふという。彼は知識・技術を使って育てた野菜を、懇請に来た人々に分け与える。知識・技術を秘匿しながらも、生産物を鷹揚に与えるのである。

知識・技術は秘密にし、他人に教えるものではない。その一方で、知識・技術は完全に閉じられているわけではない。例えばキリバス・ダンス等、世帯内で親から子へ継承されるほか、大規模な饗宴の1ヶ月ほど前に長老たちの指名した踊りの技術を持つ女性が、村の女性たちに対して集会所で指導することもあった。また、懇請してきた他人に何らかの知識・技術が伝えられることもある。以下、女性に関わる伝達と秘匿の事例をあげる。

[事例1：パンダナス葉製マット作り]

ある女性が、既婚女性にパンダナス葉マット作りを教えていた。その夫は、「彼女は親切だ(*akoi*)」といていた。夫によると他の何人かの女性もパンダナス葉マット作りを教えるという。しかし、ある1人の女性は頑なに他人に教えないという。懇請(*bubuti*)されても「彼女は教えるのを嫌がる。悪いことだ」と夫は言っていた。当の女性は「私は(マット作りが)できない(*babanga*)」と見え透いた言い訳をして、他人に教えるのを嫌がるという。

ところが、その男性とは逆に、ある20代女性はマット作りを教える女性に対して「愚かしい(*tabaua*)」と言っていた。そして、私が技術を隠す女性に作ってもらった小型マットの編み込みをじっくりと観察し、その技術を盗もうとしていた。妻が伝授されていた男性は知識・技術を教えないことを理由にある女性を悪く言い、20代女性は教える女性に対して愚かしいと言うのであった。

[事例2：調理法]

国会議員(1995年当時)の息子の妻が一時期、首都からN村へやってきた。彼女は以前、キリバス・プロテスタント教会(KPC: Kiribati Protestant Church)の女性団体(RAK; Reitan Aine ni Kiribati [キリバス女性の集い])で裁縫や料理を教えていた経歴をもつ。村で饗宴があると、彼女はその準備に頻繁によばれ、忙しそうであった。彼女は村ではあまり目にしないような、肉の煮込みやプディングを饗宴のために作っており、評判が高かった。一緒に作業していた女性たちは、そのやり方をじっくりと見て覚えようとしていた。これは、新しい知識・技術が首都からN村に導入された一例といえよう。

このように知識・技術は、私的に保持されることもあるが、他者によって模倣され、拡散していくこともある。村人は評価の高い知識・技術を懇請によって教えてもらうだけでなく、観察して盗み、自分のものとするのである。

この伝達のあり方は、徒弟制における職人技の習得法に類似していることがわかる。こうした点においても、ラパカウは身体的な知や技法であり、体系的な論理によって把握することは困難である。

1-3 技術者への懇請

技術者は村や他人のために仕事をし、またモノを作るよう要請を受ける。そのとき当然、報酬を受け取ることはない。とくに女性の手芸において、頻繁に要請の事例が見られる。

[事例3：技術をもつ女性への懇請]

1) 先述したパンダナス葉マットを編む技術を教えない女性は、村の長老たちからの要請で、パンダナス葉をきわめて細かく編みこんで作る、男性の踊り用腰巻き (*be*) を編む仕事に追われていた。ある世帯で行われた人生儀礼の饗宴でも、彼女は1人屋外で腰巻を編み続けていた。饗宴に来た周囲の女性たちは全く手伝おうとしなかった。彼女は「毎日忙しいし、目が疲れる。私はとてもかわいそうだ(*I rangi ni kainnano*)」とこぼした。しかし、夫は「人に羨まれる技術をもつのはよいことだ」と語っていた。

2) 島政府集会所の話し合いにおいて、タビテウエア南部地区6村の長老が正装用に揃いの腰布を作ることに決まった。布が到着した後、N村の長老たちが腰布製作の仕事を自分たちの村で進んで引き受けた。国会議員(当時)の妻は、学校で裁縫を教えていた経験をもつ。彼女が長老の要請を受けて、60枚もの腰布を作るようになった。「村全体で引き受けたのだから、他の女性たちにも手伝ってもらい、集会所で村の女性皆で作るのだ」と彼女は言っていた。しかし実際には、国会議員の妻以外誰も来ず、村の集会所で手廻しミシンを使って仕事をしていたのは、彼女ただ1人だった。

3) 他にも裁縫の得意な女性が数人いた。年末が近づくとクリスマス用のシャツやスカートを作ってもらうために、彼女らのところに懇請が殺到する。

島では既製品の服が売られることはほとんどなく、布さえ入手しにくい。布が入荷しても、種類が限られているため、同じ柄のシャツやスカートが時を同じくして村中に氾濫することになる。12月、私の近隣に住む女性は、毎日手廻しミシンで作業していた。目が疲れたと文句を言いながらも、クリスマスまで徹夜で作業に追われていた。そのときに使用する縫い糸も、頼まれた側の物を使い、懇請した側から返済されることはない。

こうして見ると、技術をもつ女性たちは頻繁に懇請され、拒否することができず、労力の負担は大きいことがわかる。しかも目に見える報酬が得られるわけではなく、逆に貴重な縫い糸など自らの所有物を消費することになる。技術を持たぬ同性、あるいは夫や長老たちによる搾取と見ることも可能である。

仮に、1)の夫の発言のように誇らしいことであるにせよ、当事者の女性による権力の行使として単純な解釈を行うのは困難である。つまり、同じ言葉でラパカウと呼ばれていても、知識の生み出すものやジェンダーに関わる差異を考慮しなければならない。一般に、外洋漁やレスリング、キルトスペルマ栽培など⁹、男性の知識・技術のほうが、社会的に重きを置かれる傾向がある。また、これら男性の知識・技術は、キリスト教とは対立する、呪術(*tabunea*)や禁忌との関わりが示唆される。すなわち、精霊との連関が認められる可能性があり、そうした点においても秘匿されてきたのであろう¹⁰。

第2節 キルトスペルマ栽培法

キルトスペルマ(ミズズイキ、ジャイアント・スワンプタロ; *Cyrtosperma chammissonis*)は、日常的食料というよりも、集会所に供出する贈与財としての重要性を有している(風間 [2002])。植民地期に禁止されるまでは、供出されたイモの重量を競っていたという(Luomala [1970], [1974])。今でも集会所に供出される際、イモの大きさは注目の的となる。このイモの栽培法はきわ

めてユニークであり、ピット耕法(pit cultivation)と呼ばれる。地下水が浸出するまで穴を掘り、有機物を底土に混ぜ込んだ掘削田(*rua ni bwabwai*)のなかで、さらにイモの株の周囲にパンダナス葉の縄を円形に巻いて、その中に施肥するものである。ここで、掘削田を掘ることは、かなり過酷な肉体労働であることを強調しておきたい。珊瑚島の表土は石灰質で硬く、スコップを使っても簡単に掘り返せるものではない。また、炎天下での作業はきわめて厳しいものである。ブッシュには掘りかけの穴が各所に見られ、人々は、少しずつ時間をかけて掘削田を作っている。

2-1 施肥の実際

ここでは、実際に観察した施肥の方法および複数の村人から聞いたキルトスペルマの栽培法を紹介する。1994/1995年にかけて4回、2000年に1回、掘削田での施肥作業を村人に見せてもらった。50代の男性2人、女性1人、30代および20代の男性それぞれ1人である。その際、妻や若者が補助的な役割を担うこともある。2000年に見た50代の男性による作業手順を以下に示す。

[事例4：キルトスペルマの施肥作業]

- ① 掘削田に着き、斜面を降りて水に入る。降雨が少なかったため水深は浅いが、それでもぬかるんだ田に足を踏み入れると、膝上まで水につかる。株の周囲に巻かれたパンダナス縄(ブキ)が数段重なっている株に近づく。まず、横に生えてきた小さな株を抜いて別の場所に植える。さらに、上段の緩くなったパンダナス縄を、枯れたキルトスペルマの茎で縛って固定する。
- ② 水底から泥(*bokaboka*)を取ってパンダナス縄のすぐ内側に入れる。株の周囲をぐるりと1周、手ですくい取った泥を入れていく。泥を入れた後、新しいパンダナス縄を古い縄の上に重ね、縛って固定する。灌木ハテルマギリ(*uri; Guettarda speciosa*)の枯葉(*bata*)を水に濡らし、先に入れた泥の上に乗せる。

枯葉は前もって集めておいたものである。

- ③ さらに枯葉の上に泥を乗せる。泥と枯葉の重なりは、パンダナス縄のすぐ内側に入れたため株の周囲には間隙ができ、ドーナツ状になっている。新しいパンダナス縄を重ねる。
- ④ 枯葉を泥の上に乗せ、さらにその上から枯葉を乗せる。
- ⑤ 株の周りの間隙に、前もって集めておいた黒土(*bon*)を、洗面器を用いて入れていく。黒土は、ハテルマギリやパンダナスの木の下から取ってきたものである。このとき使用した黒土は、小型の洗面器4杯分であった。隣の小さな株の周囲に、泥と余った枯葉を乗せ、一通りの作業を終える。

この施肥作業を見せてくれた男性によれば、イモが小さいときには、泥、ハテルマギリの枯葉および黒土を肥料(「キルトスペルマの食べもの[*kanan te bwabwai*」)として使う。イモが大きくなると、何枚かの葉が枯れてくるという。それを指標として、大きなイモ用の肥料に切り替える。その際に使うのは、アオイ科キングジカ属の草本(*kaura*; *Sida fallax*)、腐った木の幹(*ten mwenang*)、腐ったココヤシの幹(*bubun te kan ni*)を混ぜたものだという。

上記の事例以外に私が観察した施肥作業では、古くぼろぼろになったパンダナスの葉(*bururu*)や、白い砂(*tanon tan rua*)をパンダナス縄の内側に入れる事例もあった。

また、別の50代男性によれば、肥料として、白い砂、ハテルマギリの木の土(*tei ara uri*)、腐ったココヤシの幹(*ukiang*)、腐ったココヤシの葉(*teke*)、腐ったパンダナスの幹(*awakinabanaba*)、ココヤシの土(*iararin*)、古いパンダナスの葉があるという。

他にも、灌木のクサトベラ(*mao*; *Scaevola frutescens*)の枯葉、草本ではキングジカ属の1種、シナノキ科ラセンソウ属(*kiaou*; *Triumfetta procumbens*)の1種、オシロイバナ科ナハカノコソウ(*wao*; *Boehavia repens*)を乾燥させて、あるいは生のまま使うという。

2人の男性の話では、同じものを指示すると思われる肥料が、異なった名

称でよばれていることも興味深い。知識を他者に明かさなないことから、同一物が、異なった名称でよばれ続けてきたのかもしれない。またこれら肥料の材料は、ブッシュではどこでも簡単に入手できるものばかりであり、特別なものは何ひとつない。

2-2 栽培法の種類

肥料を使った栽培法(*ribana*)に関する知識・技術(肥料の配合や施肥のしかた)は、当然秘密にすべきである。私が見せてもらった施肥作業は、いくつもの作業過程のうち、ほんの一部に過ぎない。さほど重要ではない無難な作業のみ見せてくれたと考えられる。しかし一方で、栽培法を秘匿するのは過去のことであり、今現在では「開かれている(*E uki*)」と、逆のことをいう人もいる。私の印象では、より知識をもつ者は隠そうとし、それほど知識をもたない者は、「開かれている」ことを強調するようにみえた。

栽培法にはいくつもの種類がある。50～60代男性3人から聞き取った栽培法の名称は、①コロウア(*koroua*)、②イ・アロラエ(*I-Arorae*)、③トカマレヴェ(*tokamarewe*)、④ネイ・ボアキンナ(*Nei Boakinna*)、⑤ネイ・タイマ(*Nei Taima*)の5種類であった。

①は、タビテウエア環礁において広く知られている栽培法である。私がN村で観察した施肥作業は、すべてコロウアである。②は、アロラエ島において知られている栽培法であるという。下記の事例3)の長老は、コロウアに加えてこの栽培法の知識をもつと本人が語っていた。④は、1人の男性(50代)がいうには、アベママ島の栽培法であるという¹¹。⑤については、3人のうち1人だけが知っていた名称である。ただし、これらの具体的な方法や、栽培法ごとの特色、差異については全くわからない。

聞いた話によれば、同じ栽培法であっても、肥料の種類や混合比率、与え方に違いがあるという。すぐれた知識・技術をもつ者は、イモを単に大きくしたり、味をよくするのみならず、短期間で大きく成長させたり、緩慢に成長

させるといった調節ができると言われている。村の人々は同じコロウアを用いるというが、微妙な違いによって、イモの成長に大きな差をつけることができるかと一般に信じられている。そのような理由によって、人々は自らの知識・技術を隠そうとする。栽培法に関わる秘匿と伝授について、いくつかの事例をあげる。

[事例5：栽培に関わる知識の秘匿]

1) 施肥作業を見せてくれた50代男性によれば、栽培に関わる知識・技術は「とっておく(*kawakinna*)」べきものであり、親族以外の者に教えるのは「禁止されている(*E tabuaki*)」とのことだった。もし、親族以外の人から教えてもらいたいならば、知識・技術をもつ人に懇請し、食料を贈与しなければならない。場合によっては2ヶ月にわたって贈与を繰り返し、ようやく教えてもらえるという。仲がよければ、贈与する期間はそれほど長くかからずに済むという。

2) 施肥を見せてくれた30代男性は、遠い親族である、N村の男性から栽培法を教えてもらった。親族とはいっても遠い(*raroa*)ために、教えてもらったのは幸運(*te keraoi*)だったと語った。通常は教えてもらえないのだという。彼の父親は早くに亡くなったため、父親から継承することができなかったという。

3) カトリック説教師の資格をもつある長老に栽培法について質問した際、それまでは普通に大きな声で話していたのに、突如声を潜めた。栽培に関しては、呪術(*tabunea*)も存在していたという。彼は、仮に親族であったとしても、同じ村や近隣の村人には教えないと言っていた。もし教えたら、競合してしまうからである。競合し得ない遠くの村人であれば、教えてもいいとのことだった。私はこの長老と仲良くつきあったが、ついに栽培の実際を見せてくれないまま、亡くなってしまった。

その長老の50代の実弟(*tari*)は、1994年10月に施肥作業を私に見せてくれた。2000年7月に再訪した際、弟は「別の栽培法(イ・アロラエのこと)を知

っているから、今度は(兄に)見せてもらえ」と言っていた。その言葉は会話の脈絡から、他人に栽培法を隠して(*taua*)教えようとする兄に対し、揶揄しているものと私は解釈した。

4) 1995年2月、村の最長老がイモを掘り起こす(*rourou*)作業を行った。その様子を私も観察させてもらった。そのとき、ある40代の女性が未婚の若者とともに掘削田の横を通りかかった。若者は、最長老の作業の様子を真剣なまなざしで凝視していた。

若者と一緒にいた女性によれば、最長老の掘削田は立派であり、そこで取れるイモは大きくて柔らかく、しかも甘味があつておいしいという。最長老は、栽培に関する特別な知識を保持しており、肥料の配合がその鍵のようである。誰もがそれを知ろうとしているのだが、彼は教えるのを拒んでいる(*E tauti*)という。おそらく彼のオイ(*ai nati*)が継承するだろうとのことであつたが、実際には誰にも伝えることなく長老は世を去った。若者が最長老の作業を——秘儀的な施肥でなく単なる掘り起こしだったのに——、細かい点に至るまで漏らさぬかのように凝視していたのは、このような背景があつたからと推測できる。なお、他者のモノを「見つめる」ことは「欲しがる」ことを意味する。

栽培法は、親族内部でのみ継承されていくものと言われている。しかし実際には、上記3)の事例のように親族に対して隠されることもある。ただし、珊瑚礁では肥料として利用しうる植物や土壌といった資源には限りがある点に留意すべきである。したがって、名称の違うどの栽培法においても、使う肥料は大差ない。さらに、村人が言うには皆共通のコロウアという栽培法を用いているため、さらに差異は小さいはずである。人々の技法の間の「微妙な差異」がいかなるものか、実際にイモの成長にその差異がどの程度影響を及ぼしているのかについては、不明である。

ここで問題となるのは、栽培に関わる知識が実証的に正しいか否かではない。そうした問題とは無関係に知識は重要視され、秘匿されている。機能主

義的な解釈をすれば、降雨量の少ない珊瑚島という厳しい自然条件下にあって、かつて重要な食料であったキルトスペルマを生産する能力の有無は、死活問題だったと考えられる。現在では、日常的には米・小麦粉食品を消費しており、キルトスペルマは集会所に時折供出したり、饗宴で共食するという、社会的重要性のために栽培されている。また、掘削田を作るための重労働や、イモの栽培には呪術が用いられていたと言われる。祖霊や精霊(*anti*)との関わりにおいて、栽培に関わる秘儀的知識は、何らかの危険を伴うものだったと解釈することも可能だろう。

第3節 知識・技術の実体化

キリバスにおける知識・技術とはいかなるものか。人々の日常会話からは、実体化したのものとして、捉えられているように見える。すなわち、あたかもマニュアルのような固定的な方法があり、もし伝授さえされれば、自らのものにできるかのように言われる。果たしてそうであろうか。

キリバスの知識・技術は、対象と技術者の直接的な相互作用のプロセスである。ただし、その内実や習得過程は必ずしも詳らかではない。モノの製作、栽培、操船、踊り等、ある程度の型はあっても、単純な体系的方法に還元できる類いのものではない。むしろ、個人技や、偶然性に左右されうる——例えば漁撈や栽培——ものである。また村人個々の獲得的、あるいは生得的な才能・性格によって、できる・できないが決まる場合が多いだろう。したがって、単純な技術を教えられて、一通りの基本を学ぶことはできても、「〇〇は××の知識・技術をもつ」と噂されるようになるとは限らない。換言すれば、伝授は不完全にしか行われ得ない。そこにこそ、各人の工夫や、経験的な勘によるその場の状況に応じた変更、あるいは新たな工夫が試される余地や柔軟性がある。

また、秘密にすべき知識・技術のうち、多くは村人が誰でも一応こなせるものである。イモの栽培ができない者はいないし、ココヤシの樹液採取は少

年から老人まで男性なら誰もがができる。村でパンダナス葉のマットを全く編めない女性もいないだろう。匂いをつけたココヤシ油や糖蜜を作るのも、さして難しいわけではない。そこでは、取るに足りないように見えさえする、「微妙な差異」が問題にされる。かつてのイモの重量競争やレスリングは例外であるが、明確に優劣をつけることもない。

知識・技術は手芸品やイモの大きさ、漁獲、踊りといった目に見えるかたちで、人々の現前に具体化して現れる。目に見えるものが周囲の人々に評価され、評判を生み、良くも悪くも噂され、「〇〇は××の知識・技術をもつ」という、型にはまった語りが生まれる。そして手芸品や衣服の製作を要請されたり、知識・技術そのものの伝授が懇請される。知識・技術を村人のために使わなかったり、教えなかった場合には、妬まれて不評を買う。伝授を拒み、秘匿に徹することにより、その人は否定的な評価を受けるが、逆に知識・技術自体の希少価値を高めることにもなるだろう。このように、村人と村人との具体的な関係・交渉において、知識・技術はあたかも実体をもつかのように捉えられ、形成されていく側面をもつのである。そうした中、知識・技術をめぐる人々の交渉は、必然的に微細な権力性を帯びることになる。

おわりに — 権力胚胎の集団的抑制 —

キリバスの知識・技術は、いわば不定形な知識の様式をとり、体系的というよりも身体感覚に近接している。一部の知識・技術については、当然ながら、料理のレシピ様の記録を取ることは可能である。しかし、微妙な差異や肌理を言語化するのは困難であり、単純な記録や論理によって再現できる類のものではない。例えば、キルトスペルマ栽培における施肥のタイミングや量、物作りの微妙な指技は、数量化された基準があるわけではなく、客観的に標準化され難い、個別の状況判断に依存したものである。さらに、いくつかの知識は、キリスト教会によって禁止・否定されている呪術や精霊に関係しているようであった。

結果として、目に見えるかたちで具現化された知識・技術の産物であるモノや身体の動きは、人々により評価され、噂される。また知識・技術の伝達は懇請によって交渉される。こうした人々の相互行為のなかで、微細な権力が生成されて得ると考えられよう。村の個々人が知識を得たいと考えた時点で、その人物の内面に権力性の胚胎を看取することが、可能なためである。とくに、男性の評判に関わるキルトスペルマ栽培や外洋漁に関しては、人々の関心を強く惹きつける分だけ、知識・技術の習得が権力性を帯びていると見なすことができる。しかし、個人レベルにおいて、知識・技術に関わる権力の生成は、発展することなくそのまま留めおかれる点を見逃すわけにはいかない。

キリバスの知識・技術は多様であり、拡散している。また技術者が自らの技能を自慢することは、慎重に回避すべき事柄である。さらには、技術者は他者や集団への貢献が常に求められている点にも、留意すべきである。自らのためだけに技術を使うことは、恥 (*mama*) とされている。つまり、知識・技術は、常に微細な権力性を胚胎しつつも、特定人物の突出や集団の分化とは結びつかない。実際には、村等の集団や他者によって、個人の権力生成が抑圧されたり、また人々自らが自制的になるのである。

一方、見方を変えれば、身体性に即した知識・技術の習得過程において、あるいはその具現化において、より直接的に身体に結びつく感情や感覚が、人々の内面に生起するだろう。ある中年男性は夕方、しばしばキルトスペルマの掘削田で水浴びをしていた。その時、掘削田の縁に立ち、自ら栽培しているイモを満足気に眺めていた。男性の満足気な表情には、他者との権力を巡る関係以前にある、個人的な満足感や楽しみが垣間見える。立派に生育したキルトスペルマを眺めたり、掘削田で水浴びをするという彼の行為自体に、長年にわたって施肥し続け、栽培しているイモへの愛着を看取しうるだろう。栽培の過程において、密かな感情（喜び）が見え隠れするのである。

またキリバス・ダンスは、集会所において人前で踊るものであり、優れた技術を他者に伝達したり披露することは、ある種の権力性に結びつくといえ

る。そして、集会所における饗宴では、踊り手のみならず魅了された観衆も、一体になって熱狂し踊りだすことがよくある。踊り手はしばしば興奮のため手足が震え、トランス状態に陥る。トランス状態になった女性は、奇声や悲鳴をあげて卒倒してしまう¹²。踊りに関して言えば、こうしたトランスやコムニタス状況を等閑視するわけにはいかない。

ここで翻って考えるならば、実はこうした知識・技術に関わる身体性や喜びに対して、当人たちの意識の外から影響を与え、何らかの制御を加えることができるものこそが、個人を超えたレベルに作用する権力であろう。ただし中央政府は、人々の行為や感情に対してそこまで介入できない。本論ではこれ以上立ち入らないが、こうした権力に最も近いのは、キリスト教会および村や島の集団性であろう。個々人のもつ知識・技術が権力性を胚胎したとしても、それは集団的に制御されることにおいてのみ、肯定的に価値付けられる。キルトスペルマは集会所に供出され、集会所での踊りは人々を巻き込んで熱狂の渦を生み出す。こうした行為に個人を駆り立て、動員し、個人の身体や感覚に関わる知識・技術を集団レベルに回収しうる、個を超越した権力に着目する必要がある点を指摘しておく。

注

- ¹ 文字のなかったニューギニア高地においては、キリスト教布教者や植民地統治者とともに文字が入ってきた。人々にとって、識字化による認識論的転換が、いわゆる近代世界に入るための要件であった。そのため、世代間の思考様式や価値観の差異がきわめて大きくなる (Li Puma [2001])。ただし、文字のみが切り離されてあるのではなく、同時に時間や数に関わる観念等も認識論的に転換されたはずである。
- ² セピック地域において、人類学者の書いた民族誌そのものが、権威付けのために儀礼のなかで用いられた例がある (Gewertz & Errington [1994])。内容を読むことはできない男は、力を秘めた呪物として本を取り扱った

- のである。
- 3 神経科学においても、脳・神経系だけに固執した研究の前提を批判する論考が見られることは、興味深い（ダマシオ [2002]）。すなわち、神経系以外の身体全体に及ぶ、血液や内分泌系といったシステムへの目配りを要求するのである。
 - 4 なお、本論で採りあげる事例は、既発表の民族誌的研究（風間[2002]；風間 [2003]）から抜粋したものである。事例の詳細についてはそちらを参照のこと。
 - 5 この語は、名詞としても動詞としても使われる。動詞の場合、「○○ができる」といった意味になる。
 - 6 ただし、ここで問題なのは、秘匿された知識・技術は調査者である私にはほとんど明らかでないという限界があり、それを前提に話を進めなければならないことである。
 - 7 キリバス南部の珊瑚島は年により降雨量は不安定で、しばしば旱魃に襲われる。珊瑚性の石灰土壌と寡雨のため植生は発達せず、生業経済は脆弱である。
 - 8 また、学校の教員も例えば英語等のラパカウをもつと言われ、その語の指し示す範囲は広い。ここでは教員の知識については論じない。
 - 9 キルトスペルマ栽培は、レスリングや外洋漁とは異なり、女性を排他するものではない。しかし、やはり男性の知識・技術が重視される傾向がある。寡婦の場合は自ら栽培することもあるが、夫がいる女性は基本的に補助的な作業を担うのみである。
 - 10 村人たちは、キリスト教優位の文脈において、N村における呪術の存在を明確に否定する。そのため、どの知識・技術が呪術と結びつきうるのか、断片的な情報から類推するしかない。キルトスペルマ栽培、レスリング、漁撈、ココヤシ樹液採取といった男性の領域に関わるものは、呪術と結びつくようである。また、いい匂いをつけたココヤシ油を作る女

性の知識・技術は、男性を惹きつける恋愛呪術に関係するかもしれない。

- ¹¹ その男性は、ネイ・ボアキンナではなく、イ・ボアキンナ(*I-Boakinna*)とよんでいたが、同一の栽培法であろう。なお、ネイとは通常、女性の個人名にしばしばつけられる接頭語である。
- ¹² 踊りにおける手の震えは、男性の場合でも見られ、喜びによって引き起こされると言われる。また、踊りの前には魚や肉、コンビーフを食べてはいけないとされる。女性の卒倒に関しては、冗談めかして悪魔(*riaboro*)の所業と語られる。かつて踊りは、キリスト教会によって禁止されており、精霊・祖霊や呪術と関係していたことが示唆される。

参考文献

<日本語文献>

- 生田久美子 [2001] 「職人の『わざ』の伝承過程における『教える』と『学ぶ』」 (茂呂雄二編著『実践のエスノグラフィ』 金子書房, pp.250-246)。
- 風間計博 [2002] 「珊瑚島住民によるスワンプタロ栽培への執着——キリバス南部環礁における掘削田の放棄と維持——」 (『エコソフィア』 第10号11月, pp.101-120)。
- [2003] 『窮乏の民族誌——中部太平洋・キリバス南部環礁の社会生活——』 大学教育出版。
- ダマシオ, A. R. (田中三彦訳) [2000] 『生存する脳——心と脳と身体 の神秘——』 講談社。
- レイヴ, J. & E. ウェンガー (佐伯胖訳) [1993] 『状況に埋め込まれた 学習——正統的周辺参加——』 産業図書。
- ライバー, J. (今井邦彦訳) [1994] 『認知科学への招待——チューリングとウィトゲンシュタインを道しるべに——』 新曜社。

ポランニー, M. (高橋勇夫訳) [2003] 『暗黙知の次元』 筑摩書房。
ヴァレラ, F., E. トンプソン, E. ロッシュ (田中靖夫訳) [2001] 『身体化された心』 工作舎。

<外国語文献>

Gewertz, D.B.& F.K. Errington [1991] *Twisted histories, altered contexts*.
Cambridge: Cambridge University Press.

Li Puma, E. [2001] *Encompassing others*. University of Michigan.

Luomala, K. [1970] “Babai (*Cyrtosperma chamissonis*): A Prestige Food in the Gilbert Islands Culture,” *Proceedings of International Congress of Anthropological and Ethnological Sciences*, Vol.7, pp.488-499.

——— [1974] “The *Cyrtosperma* Systemic Pattern: Aspects of Production in the Gilbert Islands,” *Journal of the Polynesian Society*, Vol. 83, pp.14-34.